

大学評価担当者集会 2014

第二分科会「初めて評価を担当される方へ」

実施報告書



平成 26 年 11 月

大学評価コンソーシアム

まえがき

本分科会では、大学評価の実務経験がほとんどない初心者を対象に、「評価とは何か」という基本的な観点に基づき、自己評価書をどのように作成するのか、について参加者主役型の演習を通じて評価の考え方や発想法を身に付けることを第一に目指しました。

評価に関する一般的な、あるいは大学固有の事情に応じた数々のノウハウやスキルは、これからの業務で身につけていくこととなりますが、それらを適切に使いこなすためには、評価についての基本的発想をしっかり持つことが大切です。この基本的発想を持たないままでの評価実務は、その場しのぎの仕事になってしまい、「改善のための評価」という大学評価の重要な目的を果たせなくなる危険性が高まります。このようなことを踏まえ、評価担当者のほとんどが携わることになる自己評価書の作成を題材に、評価に関する基本的なノウハウやスキルの紹介を交えながら、参加者は「評価とは何か」という視点をつねに確認し、それを基に自己評価書を作成する姿勢をグループワークにより体感することで理解を深めました。

一方、各大学で実際に評価業務にあたる場合、学内の理解を得ることは評価担当者に課せられた大きな課題（使命）ですが、それとは別に、学外の理解者がいることも大切です。本分科会でグループワークを取り入れたのは、他人との協働により、多様な考え方があることを知り、自らの視野を広げ、自らの考えを深めることはもちろんですが、評価活動を通じて、学内の各組織とのコミュニケーション力を養ったり、他大学の評価担当者と気軽に相談できる関係を構築したりといったねらいもありました。

本報告書には、当日使用した資料に加え、演習の解答例としてグループワークで各班が作成した資料をつけるなど、大学評価の初心者が、本分科会を受講していなくても自ら学べるように作成しています。また、経験を積んでも、余裕がなくなったりすると、大切なことや本質的なことを忘れることがあるかもしれません。そのようなときに、本報告書を読み返すことで初心を思い起こすきっかけになれば幸いです。

平成 26 年 10 月 27 日

大学評価コンソーシアム 幹事

(新潟大学企画戦略本部評価センター 准教授)

関 隆 宏

目次

まえがき	1
1. 開催概要	3
1.1 目的	3
1.2 開催日時及び会場	3
1.3 班編成	3
2. 参加者分析	4
3. 実施状況及び演習結果	6
3.1 タイムテーブル及び実施概要	6
3.2 各班の報告（ポスター発表）	10
3.3 総括	16
4. アンケート結果	19
5. 本分科会の運営について	24
5.1 運営スタッフ	24
5.2 本プログラムの構築について	24

配布資料一式

- 事前配布資料
 - 01～02 ページ：第二分科会について
 - 03～07 ページ：導入レクチャー資料
 - 08～11 ページ：大学評価関連用語集
 - 12～14 ページ：認証評価の概要
 - 15～18 ページ：事例1【認証評価】
 - 19～20 ページ：目標（計画）に基づく評価の概要
 - 21～22 ページ：事例2【目標（計画）に基づく評価】
- 第二分科会参加者リスト
- 当日配布資料

1. 開催概要

1.1 目的

大学評価では、まず大学の諸活動の現状把握を行い、その結果を通じて自大学の特徴や課題を明らかにします。そのうえで特徴をさらに伸ばしたり、課題を改善する活動への支援を行ったりします。そのような活動は、ひいては大学の諸活動に対して社会からの理解を促進することにつながります。

そのため、本分科会では、「評価とは何か」という基本的な観点に基づき、自大学で自己評価書を作成する際に求められる着眼点・発想法・留意点を身につけることを目的とします。この分科会では、基本的な部分を講義形式で行い、受講者主役型の演習を通じて、内容理解の定着を図りますので、積極的な参加を期待します。なお、大学評価の実務経験がほとんど無い初心者を対象とします。

1.2 開催日時及び会場

日時： 平成 26 年 8 月 29 日（金） 9:30～16:00

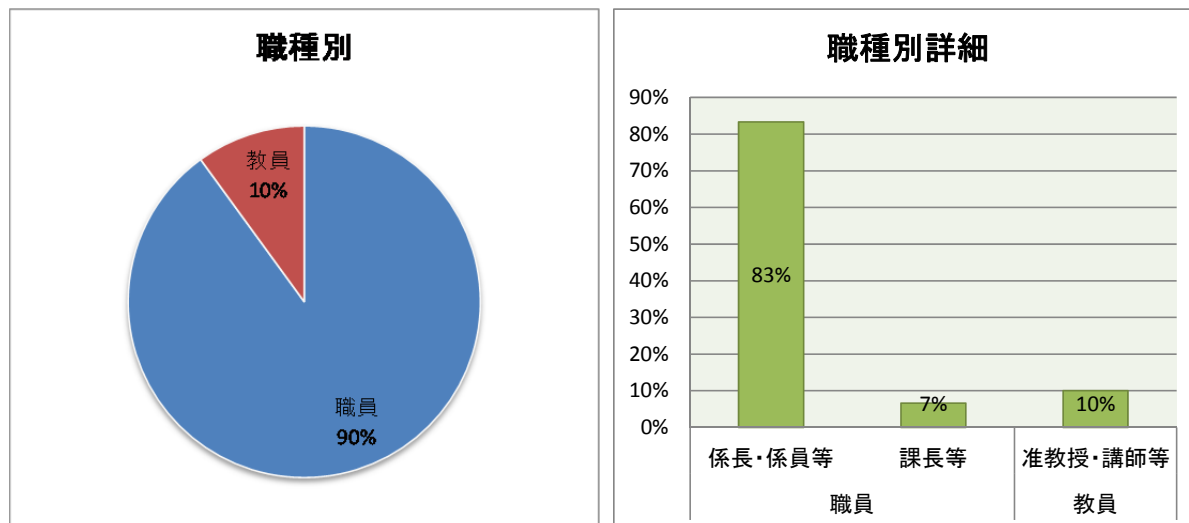
会場： 神戸大学 六甲台第二キャンパス 瀧川記念学術交流会館 大会議室
神戸大学百年記念館（神大会館） 会議室 A

1.3 班編成

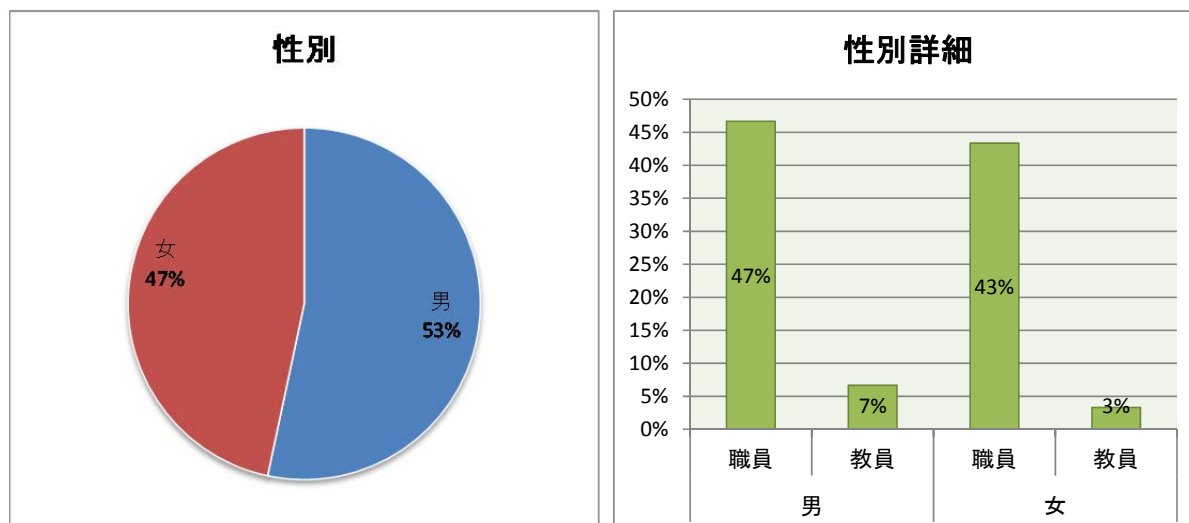
本分科会申し込み時に入力していただいた「所属機関名」、「所属部課名」、「役職名」及び「評価との関わり」を参考に、班編制を行いました。業務を行う上で、経験的・立場的に近い方をまとめ、グループワーク時において、参加者同士のディスカッションが活発になるように配慮しました。

2. 参加者分析

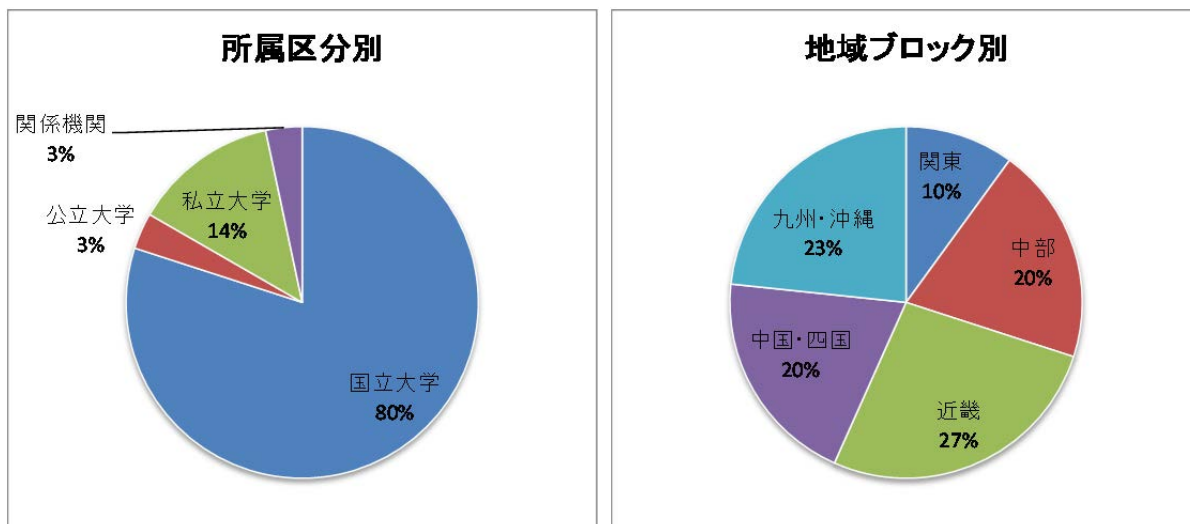
第二分科会には、計 30 名からの申し込みがあり、当日は申し込んだ全員が参加しました (N=30)。参加者の属性分析は、申し込み時に参加者からご提供頂いた所属や職種等の情報を基に行いました。なお、「参加者」とは、国公立大学、短期大学及び関係機関の「通常会員」であり、運営スタッフである「幹事」及び「運営協力者」を除いています。



職種別の参加者比率は、職員が 90%、教員が 10%でした。また、職員の職層を「課長等」及び「係長・係員等」、教員の職層を「教授等」及び「准教授・講師等」に分けて示します。職員の係長・係員等が 83%と最も多く、次が教員の准教授・講師等で 10%でした。職員の係長・係員等の参加が多いのは、本分科会が大学評価の実務経験がほとんどない初心者を対象としたこと、本集会が実務的な内容を扱った研修会であることと一定程度整合的なデータと考えられます。

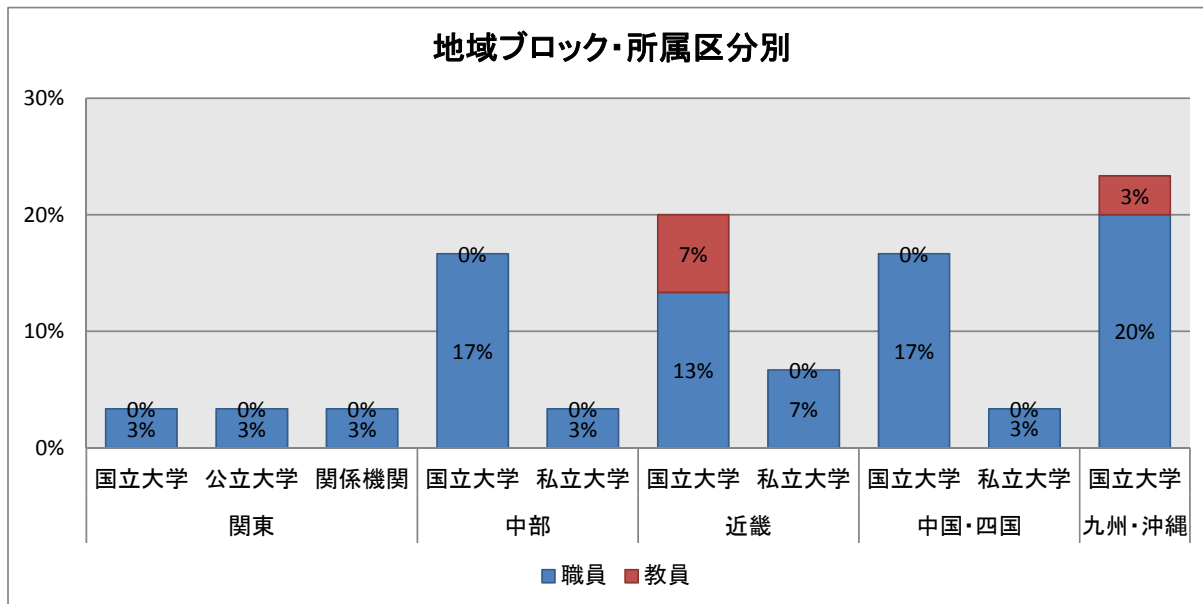


性別は、男性が 53%、女性が 47%でした。また、職種別とあわせて確認すると、男性職員が 47%と最も多く、次が女性職員で 43%でした。



所属区分別では、国立大学が 80%を占めており、私立大学は 14%でした。また、地区ブロック別では、平成 25 年度と同様、本集会の開催が神戸大学であったことから、近畿地区の参加者が 27%と多く、次が九州・沖縄地区で 23%でした。なお、北海道・東北地区からの参加者はいなかったことから、西日本の国立大学を中心に参加していることが伺えます。

地域ブロック・所属区分別と職種別をあわせて確認すると、国立大学職員の参加状況については、九州・沖縄地区の 20%が最も多く、中部地区及び中国・四国地区の 17%でした。また、私立大学職員の参加状況については、近畿地区の 7%が最も多かったです。



(大野 [鳥取大])

3. 実施状況及び演習結果

3.1 タイムテーブル及び実施概要

時刻	実施事項
午前の部	共通講義（第一分科会、第二分科会及び第四分科会）
09:50-10:30	講演「我が国に於ける評価と IR の現状と課題」 九州大学 基幹教育院 准教授 小湊卓夫
	認証評価に基づく自己点検・評価
10:50-11:20	スタッフ紹介 導入レクチャー
11:20-12:20	認証評価制度の概要 演習（講義形式） 事例1【認証評価】 答え合わせ
12:20-13:10	昼食
午後の部	目標（計画）に基づく自己点検・評価
13:10-14:30	目標（計画）に基づく評価の概要 演習（グループワーク形式） 事例2【目標（計画）に基づく評価】
14:30-14:40	休憩
14:40-15:50	ポスターセッション（グループワークの結果発表） 答え合わせ
15:50-16:00	まとめ

09:50-10:30 共通講義

今回は、新たに第一分科会、第二分科会及び第四分科会の共通講義を設定しました。内容は、①我が国の評価と IR の現状、②これまでの取組のまとめ（評価と IR 活動における収集・分析・活用について）及び③近年、米国の大学によく見られる **Institutional Effectiveness** であり、第二分科会の参加者は、小湊代表幹事による「我が国に於ける評価と IR の現状と課題」のみ受講しました。

10:50-11:20 講師挨拶、進行手順の概略説明

第二分科会を担当するスタッフの自己紹介を行った後に、この分科会では、「評価とは何か」という基本的な観点に基づき、自大学で自己評価書を作成する際に求められる着眼点・発想法・留意点を身につけるといった分科会の主旨、スケジュール、進め方について説明を行いました。

次に、導入レクチャーとして、「大学の評価に関する基本的な考え方、発想法を体感する」という本分科会の「ねらい」、「1. 大学評価とは」、「2. 評価業務を行うに当たって、最も意識しておきたい理念」、「3. 実際の取組を様々な角度から評価するのに必要な観点（評価の観点）」

及び「4. 評価書を作成する／読む上でのチェックポイント」という流れで、評価に関する知識の整理と共有を行いました。また、「5. 評価を改善に活かすために」として、評価業務のガイドライン及びIR（インスティテューショナル・リサーチ）に関する補足説明を行いました。



11:20-12:20 認証評価制度の概要及び演習（事例1）

認証評価制度の概要として、「1. 認証評価とは」、「2. 認証評価の特徴」、「3. 大学機関別認証評価を行う認証評価機関及び各機関の評価基準」及び「4. 大学機関別認証評価のスケジュール」について、講義を行いました。

次に、配布資料（15～18 ページ）の事例1【認証評価】について、個人ワークによる演習及びグループでの意見交換を行いました。演習では、評価大学という架空大学の自己評価書の「基準7 学生支援」を題材として、個人が【現状の説明】及び【分析】を読み込んだうえで、記述内容及び根拠資料を吟味し、グループ内で問題点の指摘、改善策の提案等について共有しました。

その後、スタッフが準備した解答例を基に、「問題のある記述等」、「問題点」、「記述の改善策等」及び「該当するチェックポイント番号」について、講師が解説及び補足を行いました。



13:10-14:30 目標（計画）に基づく評価の概要及び演習（事例2）

目標（計画）に基づく評価の概要として、「1. 目標（計画）に基づく評価とは」及び「2. 認証評価と目標（計画）に基づく評価の性格の違い」について、講義を行いました。また、グル

ープワークの進め方、発表及びポスターセッションの実施方法について、講師が説明を行いました。

次に、配布資料（21～22 ページ）の事例2【目標（計画）に基づく評価】について、グループワークによる演習を行いました。演習では、評価大学の目標・計画の「計画6－1：各種支援策を充実し、留学生の受入を積極的に進める」を題材として、個人が報告書を読み込んだうえで、グループ内で記述内容について討議し、問題点の指摘、改善策の提案等を整理しました。



14:40-15:50 発表及びポスターセッション

事例2【目標（計画）に基づく評価】について、各班における討議結果をポスターにまとめて発表を行いました。次に、各班との意見交換を目的としたポスターセッションを行い、各班で注目する問題点が同じでも改善策等が異なること、同じ事例を用いてもポスターのまとめ方が様々であること、などを体験していただき、参加者による情報共有と今後のネットワーク作りをしました。

その後、スタッフが準備した解答例を基に、「問題のある本文の記述等」、「問題点、課題」、「改善策、解決策」及び「該当するチェックポイント番号」について、講師が解説及び補足を行いました。





15:50-16:00 まとめ

今回は2つの事例を取り上げて、自己評価書を作成するための勘所を体感していましたが、各大学で自己評価書を作成する過程で、今日各班で議論したような問題が生じることもあると思います。今日の経験を活かしてよりよい自己評価書を作成できるようになれば、評価実務担当者として次のステップに入ることになると考えられます。

3.2 各班の報告（ポスター発表）

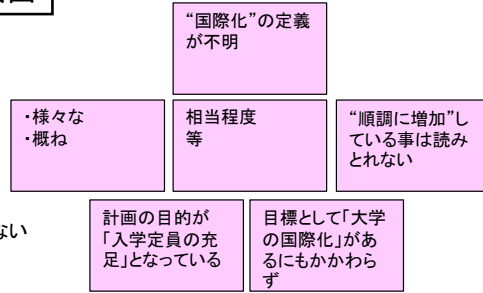
1班	①	②	③
<p>実施把握による大学の特性にあった国際化政策の具体化</p>	<p>資料6-1-2 留学生出身国割合</p>	<p>留学生受入政策の不在</p> <p>↓</p> <p>アジアへの偏り</p> <p>↓ ?</p> <p>入試広報上の偏り？</p>	<p>国費留学生も含めて把握 短期留学生</p> <p>留学生アンケートの実施 満足度</p>
<p>支援策の更なる充実</p>	<p>計画6-1 各種支援策</p>	<p>入試回数が増 積極的な情報提供 チューターによるケア のみ</p>	<p>支援策 ・授業料減免(入学科) ・中国語対応 ・学生募集</p> <p>掲示板 ・各種言語で ・Web利用</p>

2班

問題点、課題の抽出

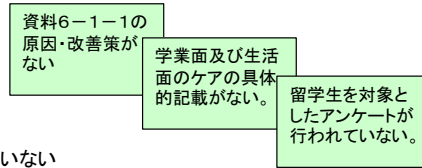
1. 記述・表現が明確か

- ・言葉の定義が不明
- ・表現があいまい
- ・計画が目標にそっていない



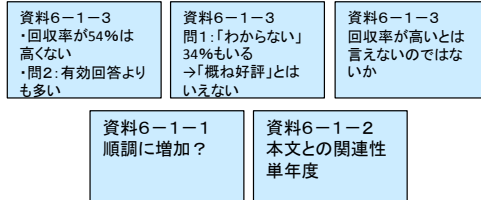
2. 具体性はあるか

- ・原因や改善策が示されていない
- ・具体的な記載がない
- ・計画にそったデータが準備できていない

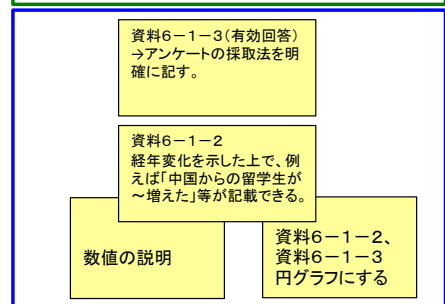
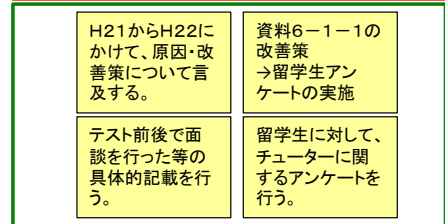
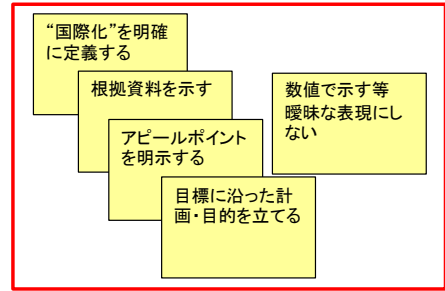


3. データは適切か

- ・本文との整合性
- ・根拠が不十分
- ・適切な資料の提示



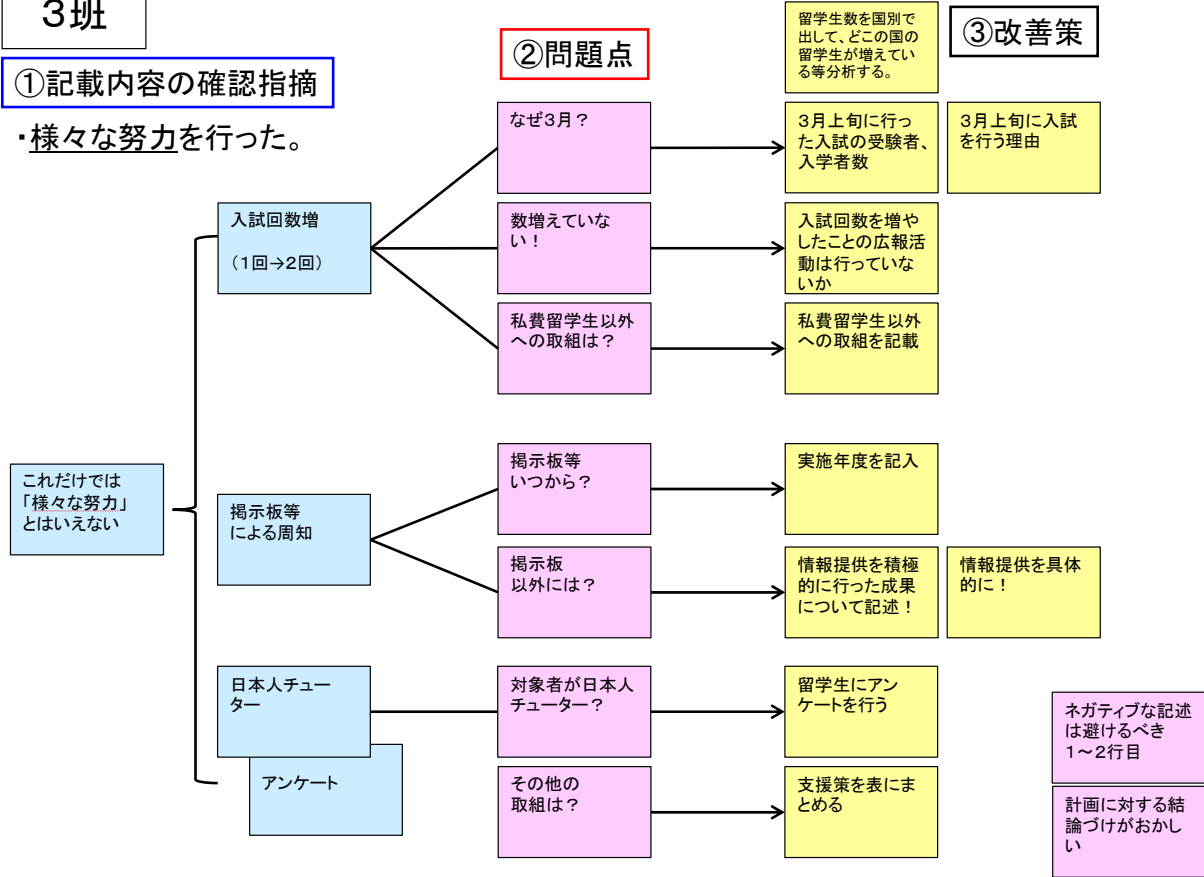
改善点、解決策



3班

①記載内容の確認指摘

・様々な努力を行った。



4班

1. 記述・表現が明確か。

<p>本学では、18歳人口の減少に伴い、日本人学生のみで入学定員を充足することは困難になることが予想されるので、留学生の受入を積極的に進めるために様々な努力を行った。</p>	<p>入学後の留学生に対し、掲示板等により、奨学金、住宅等に関する情報提供を積極的に行っている。</p>	<p>計画6-1 各種支援策を充実し、留学生の受入を積極的に進める。</p>	<p>日本人チューターにアンケートを行ったところ、概ね好評であったことから、国際化が相当程度進められたと考えられる。</p>	<p>1年次と2年次の留学生1名に対し、1名の日本人学生のチューター(任期2年)をつけて、学業面及び生活面のケアをするなど手厚い支援策を施している。</p>	<p>本学では、18歳人口の・・・ 留学交流課では、・・・</p>
<p>日本人学生のみで充足できないから留学生を積極的に受け入れるでは、目標と合わない。</p>	<p>留学生に対する情報提供の方法は、掲示板以外にないのか。</p>	<p>各種支援策とは具体的にないか。</p>	<p>アンケート結果のみで、国際化が相当程度進んでいるとは言えない。</p>	<p>チューターの任期2年の内容はどうか。継続なのか、単年か。</p>	<p>留学交流課を主語としているが、全学的な取組として表現しても良かったのではないか。</p>
<p>・目標と合っていない ・大学の国際化の観点から記述してほしい</p>	<p>情報提供の方法をより詳しく ・掲示板、HP、メール ・オリエンテーション実施状況</p>	<p>入試制度の改正やチューター制度以外の支援策を記述する必要がある。</p>	<p>留学生比率や全学の留学生の推移など他の指標もあわせて示す必要がある。</p>	<p>日本人学生によるチューター制度の運用方法をより詳しく。 (要項などの根拠資料があるとより良い。)</p>	<p>担当部署を確認したうえで、全学的な取組であれば主語を「本学では」に統一。</p>

2. データは適切に使われているか。

<p>私費外国人留学生の受入数は、平成20年度の50名から、平成24年度には65名へと順調に増加した。</p>	<p>資料6-1-2 留学生の出身国の割合 (平成24年度)</p>	<p>私費外国人留学生の入学試験については、毎年12月に1回だけ行っていたものを、平成21年度入学生向けの入試から3月上旬にも行うこととした。その結果、順調に増加した。</p>	<p>日本人チューターにアンケートも行ったところ、概ね好評であったことから、国際化が相当程度進められた</p>	<p>[資料6-1-3] 問1 ・チューターをやったことで国際感覚が身につきましたか。 そう思う 40% まあそう思う 10%</p>
<p>H20年度の50名→H24年度の65名の順調に増加とあるが、本当にそうか。人数に増減あり(年度によって)</p>	<p>資料6-1-2(出身国割合)は必要か。</p>	<p>受験の機会を増やしたが、果たしてそれが留学生受入数に繋がっているのか。</p>	<p>留学生に対しても、チューターに関してアンケートを取るべきではないか。</p>	<p>チューターをやった良かったと思う割合が50%なのに、概ね好評と言うのはどうか。</p>
<p>・順調とは言えないのではないか。 ・増減に差がある年度もあり、増減の理由が必要ではないか。</p>	<p>本文に、留学生の出身国の割合について記載するか、資料6-1-2を削除する。</p>	<p>入試の回数を増やすことによって、具体的にどれだけ受験者数が増えたかを、12月/3月に分けて示す等、根拠、データ等を示すことが必要。</p>	<p>・留学生に対するアンケートは行っているのかどうか確認する。 ・あれば記述する。</p>	<p>・「概ね好評」× ・50%の人が国際感覚が身につきましたかという質問に「そう思う」と答えた。</p>

5班

1

積極的な努力
→留学生の入試回数
だけ？

曖昧な表現

概ね

曖昧な表現

相当程度

「学業面及び生活面の
ケア」って具体的に何
したの？

「概ね好評」とあるが
資料6-1-3のアン
ケートでそれが言える
のか？

アンケートは日本人
チューターだけ？
留学生へのアンケート
は？

留学生の受入は、入
学定員充足のため？
大学の国際化のため？

留学生の奨学金等の
利用状況は？

アンケートの実施時期
について(H24. 9)
→もう少し先の方がい
いのでは？

2(A)	留学生数の表 (6-1-1)	(B)	(C)
	在籍者が分からない	順調に増加した	(6-1-2) 留学生の表 (出身国)
私費しか分からない	全体に対する割合が 分からない	表と合致しない	何を示したい？
		3月入試の結果は？	本文での記述がない
		H21の増加理由	アジア以外の留学生 を増やす取組は
		H22で急激に減少し た理由	経年の表にする (H20~H24)
		H23の回復の理由	目標の記述を足す
		3月入試を実施した効 果	分析の記述を足す
			アジア中心の要因・強 み記述を足す

6班

課題①記述表現が不明確

課題②データが適切に使われていない

(A) 言葉の定義

国際化の手法
国際化の定義

解決策

建学の精神や教
学の理念から「国
際化」の内容を明
確にする。



目指すべき国際
人とは何か。

資料6-1-1
平成21年度から
平成22年度は減
少

平成20年度から
平成21年度は、
成果として強調

平成20年から平成21年
の増加について、12月
と3月の内訳と、仮に留
学生のアンケート「2回
やってくれると助かる」
等があれば添付する。

平成21年度から平成22
年度の減少の原因・分
析と平成22年から平成
23年の回復の理由を報
告してもらう。

資料6-1-2
出身国の割合が
[平成24年度]し
かない

資料6-1-2
結果が文章化さ
れていない

資料6-1-1と同様、
資料6-1-2も平成20
年度から平成24年度
の割合を示す。

資料6-1-2
出身国割合を文章化す
る。

(B) 曖昧な用語

様々な努力	掲示板等
「概ね好評」とは 言えない	各種支援策
「積極的」が読み とれない	手厚い
相当程度	

解決策

入試を年2回実施
すること以外の努
力は何か具体的
に記述する。

資料6-1-3
回収率が少ない

資料6-1-3
問1の問題が曖
昧

解決策

資料6-1-3 問1
例えば、「留学生との交流が深まり、
他文化への理解・関心が深まりました
か」等に変える。

課題を解決した過
程を具体的に記
述する。

資料6-1-3調
査対象
日本人チューター
ではなく留学生

資料6-1-3
留学生向けアンケート実施

データを使って全
体を表現する。

日本人チューターアンケートを活用す
る場合(資料6-1-3)
(例)
「留学生の受け入れに伴い日本人学
生の国際感覚が身についた、というア
ンケート結果が得られた。このことか
ら本学における国際化の進展に結び
つけられた。」

「手厚さ」を学生の
声から導けていな
いので、しっかり
調査する。

対策したことはす
べて書き出し、整
理する。

3.3 総括

講義編で「4. 評価書を作成する／読む上でのチェックポイント」として、①記述・表現の明確性、②説明の具体性、③データの適切性、④評価の基準や観点の捉え方、取組の計画そのものの妥当性、の4つを挙げました。

演習では、初心者向けということをお案して、上記①～③を中心に、自己評価書のどの記述がどのような理由で問題があるのか、そして評価担当者がどのような記載に修正するか、あるいは担当部課にどのような修正依頼を行うかについて議論しました。

なお、自己評価書の作成過程で担当組織に報告を依頼することがあると思いますが、自らは当たり前だと思っけていても、良い取組をしていることに気付かない場合も往々にしてあります。評価担当者がそのようなものをうまく引き出すことも大切です。

ここでは、以下に示す自己評価書の代表的な問題点を中心に、各班から出てきた指摘や意見、講師による補足説明等をまとめておきます。

- 「日本人学生のみで入学定員を充足することは困難になることが予想される」(関連ポイント：④)

目標にある「大学の国際化」に即した内容ではないという指摘(2班、4班、6班)がありました。目標と計画の対応を考えれば、入学定員の充足に関する説明は不要であると思います。もし修正するならば、「ネガティブな記述は避け」(3班)や「大学の国際化の観点から記述してほしい」(4班)の意見が参考になります。

- 「留学生の受入を積極的に進めるために様々な努力を行った」(関連ポイント：②)

「様々な努力」が曖昧な表現であるとする意見(2班、6班)と、入試回数の増加、掲示板等による周知、日本人チューターの配置等だけでは十分とはいえないとする意見(1班、3班、5班)がありました。また、新たな取組が入試回数の増加だけであると考えられるので、それ以外の努力した内容を具体的に記述すべきという指摘(6班)や、入学料・授業料の減免、中国語への対応、ウェブの利用等の現場ならではの具体的な改善提案(1班)もありました。

この指摘に関連して、計画の趣旨から若干外れますが、大学間交流協定の締結、留学生フェアへの参加等の留学生獲得のための取組や留学交流課による支援体制の充実等があれば追記することが考えられます。

- 「私費外国人留学生の入学試験については、毎年12月に一回だけ行っていたものを、平成21年度入学生向けの入試から3月上旬にも行うこととした」(関連ポイント：②, ③, ④)

私費外国人留学生の入学試験の実施回数の増加が、留学生受入数の増加につながっているのか分からないという指摘(4班)がありました。これについては、外国人留学生の12月入試と3月入試それぞれの実施状況を根拠資料として示してほしい(3班、4班、5班)、「3月入試を実施した効果」(5班)について述べる必要があります。このほか、なぜ3月に実施することになったのか、私費留学生以外に対する取組が記されていないという指摘(3班)もありました。

- 「その結果、私費外国人留学生の受入数は、平成 20 年度の 50 名から、平成 24 年度には 65 名へと順調に増加した（資料 6-1-1：留学生数の推移；資料 6-1-2：留学生の出身国の割合）」（関連ポイント：②, ③）

資料 6-1-1 について、留学生数の推移には増減があり、順調に増加しているとは言えないので、極端な増減のあった年度についてはその原因・理由を述べるべきという指摘（2 班、4 班、5 班、6 班）がありました。また、在籍者数が分からないので、全体に対する留学生の割合も分からないという指摘（5 班）もありました。したがって、しかるべき分析を加えた上で「増加傾向にある」くらいの表現にとどめるべきでしょう。また、平成 22 年度の 30 人は、他の年度に比べて極端に人数が少なく、誤植の可能性（80 人かもしれない）も考えられるので、担当者を確認する必要があるでしょう。

資料 6-1-2 について、本文と関係のある資料なのか（2 班）、そもそも必要なのか（4 班）、対応する本文が記載されていない（5 班、6 班）という指摘がありました。本文の内容を変えないのであれば「削除する」（4 班）べきでしょうし、そうでなければ「アジアへの偏り」（1 班）を踏まえて、「経年変化を示し」つつ、例えば「中国からの留学生が～増えた」（2 班）のように修正するとか、留学生がアジア中心になっている要因（5 班）を記載するとかすべきでしょう。また、（単年度の）「出身国割合を文章化する」（4 班、6 班）という意見もありましたが、留学生の増加傾向を述べる趣旨から考えると、これだけではかえって何を示したいのか分からなくなるでしょう。

- 「入学後の留学生に対し、掲示板等により、奨学金、住宅等に関する情報提供を積極的に行っている」（関連ポイント：②, ④）

掲示板等による周知はいつから行っているのか（3 班）、掲示板以外の情報提供の方法はないのか（3 班、4 班）という指摘がありました。前者について、当該計画期間以前から日常的な情報提供を行っていたのであれば、計画の有無にかかわらず当然行われると考えられることから、記載の必要はないでしょう。後者は、『積極的』が読み取れない」（6 班）につながることから、情報提供の詳細やその成果について記述すべき（3 班、4 班）という提案がありました。

- 「留学交流課では、1 年次生と 2 年次生の留学生 1 名に対し、1 名の日本人学生のチューター（任期 2 年）をつけて、学業面及び生活面のケアをするなど手厚い支援策を施している」（関連ポイント：②）

チューターの内容や、学業面及び生活面のケアの具体的内容が記載されていない（2 班、4 班、5 班）ために、「手厚い」が曖昧（6 班）になっているという指摘がありました。したがって、チューター制度の運用方法の詳細を説明する、あるいは要項等を根拠資料としてつける（4 班）や、「手厚さ」を学生の声から導くための調査を行う（6 班）などにより、学業面及び生活面のケアの具体例やその効果について述べる必要があるでしょう。

- 「日本人チューターにアンケートを行ったところ、概ね好評であったことから（資料 6-1-3：日本人チューターへのアンケート結果）、国際化が相当程度進められたと考えられる」（関連ポイント：①, ②, ③, ④）

データの内容に関する問題として、日本人チューターに対するアンケートしか行われず、留学生に対するアンケートを行う必要があるという指摘（2 班、3 班、4 班、5 班、6 班）がありました。

データの解釈に関する問題として、資料 6-1-3 からアンケート結果が「概ね好評」といえるのか（2班、4班、5班、6班）、「アンケート結果のみで、国際化が相当程度進んでいるとは言い難い」（4班）という疑問が呈されました。また、「概ね」や「相当程度」は表現が曖昧である（2班、4班、6班）、アンケートの回収率が高くない（2班、6班）、日本人チューターアンケートの活用の仕方に工夫が必要（6班）という指摘もありました。

また、「国際化が進んだ」と言いたいのであれば、「留学生比率や全学の留学生の推移など他の指標もあわせて示す必要がある」（4班）のはもちろん、チューター以外の日本人学生や留学生に対するアンケートも必要になるでしょう。また、アンケートの設計にあたって、例えば、「留学生との交流が深まり、多文化への理解・関心が深まりましたか」（6班）など、『国際化』の意味する具体的内容を明確に」（6班）した質問を設定する必要があります。留学生に対するアンケートでは、大学に対する満足度の調査（1班）だけでなく、計画の「各種支援策を充実し」に照らして、留学生に対する各種支援策の満足度や要望などの調査も望まれます。

さらに、目標・計画に立ち返ると、「国際化」や「各種支援策」の定義が不明（1班、2班、4班、6班）であることから、大学の特性にあった国際化政策に課題があるという見方（1班）もでき、結果として「計画に対する結論づけがおかしい」（3班）こととなります。これについては、目標・計画の立案時や報告時に「国際化」や「各種支援策」の意味するところを担当者と確認することが大切です。

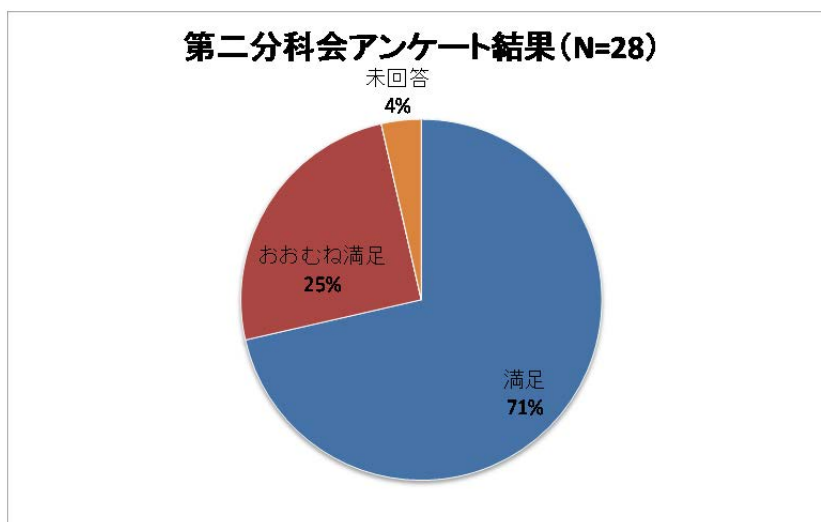
（関 [新潟大]・大野 [鳥取大]）

4. アンケート結果

参加者アンケートの回収率は93.3%で、「満足」及び「おおむね満足」が占める割合は、全体の96%でした。肯定的な回答の理由として、各種評価制度に対する理解、評価に関する基本的な概念や基礎知識の習得、グループワークによる意見交換や情報共有、などが挙げられていました。

大学評価担当者集会全体を通して、良かった点としては、上記に加えてケーススタディによる実践的な取組、異なる視点を持つ他大学担当者との交流があり、悪かった点としては、分科会の時間が短い、などが挙げられていました。

来年のテーマや今後の要望としては、第二分科会の継続開催の要望が多く、評価書の具体的な書き方やIR（初心者向け）に関する研修等がありました。また、研修回数の充実、評価スキルのセミナー実施、参加者のバランス等に関する意見がありましたので、平成27年度の開催に向けて参考にします。



アンケート結果の詳細については、以下のとおり。

No.	満足度	選択理由	意見・感想				属性
			良かった点	悪かった点	来年のテーマ	その他意見・要望等	
1	①満足	他大学の評価担当者と話しながらケーススタディができたことが大変貴重であったと感じています。	ケーススタディが主になっている点がとてもためになりました。	なし	アンケートなどの有効なとりまとめ方、データの見せ方など、評価書作成にあたっての具体的なスキルが学べると有り難いです。	大変ためになりました。ありがとうございました。	国
2	①満足	各班で着目点が変わっていたり、表現の異なる点がよく分かった。	他大学の担当者を知り合え、今後の参考になった。	特にないです。	研究に対する分析方法。	ありがとうございました。	
3	①満足	基礎固めにつながる知見を得ることができた。	大学の規模、特色を越え、様々な意見を得ることができたこと。	時間がもう少し長いと良いかな、と思いました(分科会)。		とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。	国
4	①満足	認証評価、目標(計画)に基づく評価について、注目すべき点がいりいろわかったことが良かった。					
5	①満足	・評価全体の基礎を勉強できた。 ・自分と同様に評価経験の浅い他大学事務職員の方と共に考え、ポスターを作成して考えを共有し、他の班の違う視点も学ぶことができた。 ・情報共有や関係構築ができた。	一度、評価についてしっかり学び、考える機会があればと思っていたので、良い機会だった。				

7	①満足	・他大学の方と、同じ課題に取り組む者どうしとして、交流ができて良かったです。 ・学内では、評価は孤独なので、いろいろな話ができて良かったこと。 ・評価としての業務について、理解ができたこと。	評価業務が初めてで、わからないことが多かったのですが、この集會に参加し、理解が深まりました。	ありません。		ありがとうございました。	
8	①満足					私立大学からの参加者が増えることによりよいと思います。	私
9	①満足	①他大学の方の考え方を聞くことができたので勉強になりました。 ②評価する側からの視点で見た場合に見えてくるものが非常に新鮮でした。相手の視点・立場に立って文章を書くという基本的な姿勢を改めて思い知らされました。	2日目からの出席でしたが、講義とグループディスカッションのバランスが良かったと思います。講義は、端的で分かりやすかったです。			今日の資料は改善点が明らかなものを使用しましたが、可能であれば、実際の資料も使用して検討してみたいです。	私
10	①満足	・評価の基本が学べたこと。 ・初めての人にとって、どのようなポイントを押さえれば評価書の作成や読解ができるのかを理解することができた。	評価の基礎が学べたこと。	時間が短いこと。		・基本の研修を充実して欲しい。 ・研修の回数を増やして欲しい。 一評価書を「読む」「書く」「直す」「設計する」など、評価のプロセスで重要なポイントを学べるセミナーがあれば助かります。	関
11	①満足	色々な大学の人と情報交換することができた。	色々な大学の人と情報交換することができた。				
12	①満足	部局から提出された文章の表現の裏側についての考え方を知ることができたため。	グループワークであったため、他大学の事例を知ることができた点。	特に思いあたりません。			
13	①満足	同じレベルの人たちと意見交換、ディスカッションをすることができた点で良かった。				グループワークが終わった後に、情報交換会を行った方が楽しめるのではないかな。	国
14	①満足	様々な視点により、着眼点の視野が広がりました。	他大学担当者との交流が持てたこと、及び、抱える苦労等についても共有できたことにより、今後の業務に意欲的に取り組めるキッカケとなった。				
15	①満足	・他大学との交流ができた。 ・自分と異なる視点を知ることができた。 ・評価者の視点を持つことの大事さを学んだ。	第二分科会での交流、学習内容。	一日目の講演内容が難しすぎた。時間に限りがあり、内容が全て語られなかった点。			公
16	①満足	他大学の担当者の考え方や、参考となったため。	客観的にみることが大切であることの認識ができた。			スタッフの方々ありがとうございました。	
17	①満足	グループワークに多くの時間がさかれており、講義形式では質問しづらい基本的な事も聞くことができた。とても有意義な分科会でした。					国
18	①満足	・他大学での評価に対する取組を知ることができた。 ・評価制度の全体像について、理解できた。	学内唯一の部署になるため、共有者がいなかったが、同じ分野を担当している方と知り合う機会となった。				
19	①満足	具体的なポイントが解説→実践という流れで修得できたこと。	内容もさることながら、運営もすばらしかったです。	ないです。		同内容でOKと思います。新参加者と異なる分科会参加で、問題ないかと。	国
20	①満足	・実際にグループになって基本的な評価業務の演習を行えたため。 ・他大学の方と情報交換もできたため。	・会場が十分に広がった。 ・指導スタッフが丁寧だった。 ・配付資料は詳しく書かれていて分かりやすかった。	・会場へのアクセスが少しだけ悪い(坂等が多い)。			国
21	②概ね満足	グループがみんな国立大学の人だったので、話が通じやすかった。	人数がちょうどよかった。	部屋が寒かった。		初任者研修は毎年やって、沢山の人が参加してもらおうとよい。	
22	②概ね満足	班に分かれての演習で、自分の気付かなかった事のような意見を聞くことができました。勉強不足であることを思い知らされました。	班に分かれての演習は大変良かったです。「初めて評価を担当される方」の対象だけではなく、上級になっても、同様の形式が行われてもいいのかと思いました。			評価を担当する部署に異動してきたばかりの者にとって、昨日の講演は多少難しく思われました。	
23	②概ね満足	グループワークの時間をもう少し欲しかった。	評価業務への取り組み方が分かって良かった。	初日にグループワークがほしかった。			国
24	②概ね満足	実際に書くことになる文章の問題点を指摘するという形式だったので、気をつけるべき点を確認できた。	評価・IRのこれまでの取り組みや流れを知ることができた。 ・演習形式・グループワーク形式で実際の作業を体験できた。	特にないです。			

6	①満足	評価書作成プロセス、チェックポイントが理解できたから。さまざまな他の方の視点が学べたことも良かった。	情報交換会、分科会。		「ウケる」評価書の書き方、ポイントアップの方法。		国
7	①満足	・他大学の方と、同じ課題に取り組む者とうとして、交流ができて良かったです。 ・学内では、評価は孤独なので、いろいろな話ができて良かったこと。 ・評価としての業務について、理解ができたこと。	評価業務が初めてで、わからないことが多かったのですが、この集會に参加し、理解が深まりました。	ありません。		ありがとうございました。	
8	①満足					私立大学からの参加者が増えることよりよいと思います。	私
9	①満足	①他大学の方の考え方を聞くことができたので勉強になりました。 ②評価する側からの視点で見た場合に見えてくるものが非常に新鮮でした。相手の視点・立場に立って文章を書くという基本的な姿勢を改めて思い知らされました。	2日目からの出席でしたが、講義とグループディスカッションのバランスが良かったと思います。講義は、端的で分かりやすかったです。			今日の資料は改善点が明らかなものを使用しましたが、可能であれば、実際の資料も使用して検討してみたいです。	私
10	①満足	・評価の基本が学べたこと。 ・初めての人にとって、どのようなポイントを押さえれば評価書の作成や読解ができるのかを理解することができた。	評価の基礎が学べたこと。	時間が短いこと。		・基本の研修を充実して欲しい。 ・研修の回数を増やして欲しい。 →評価書を「読む」「書く」「直す」「設計する」など、評価のプロセスで重要なポイントを学べるセミナーがあれば助かります。	関
11	①満足	色々な大学の人と情報交換することができた。	色々な大学の人と情報交換することができた。				
12	①満足	部局から提出された文章の表現の裏側についての考え方を知ることができたため。	グループワークであったため、他大学の事例を知ることができた点。	特に思いあたりません。			
13	①満足	同じレベルの人たちと意見交換、ディスカッションをすることができた点で良かった。				グループワークが終わった後に、情報交換会を行った方が楽しめるのではないかと。	国
14	①満足	様々な視点により、着眼点の視野が広がりました。	他大学担当者との交流が持てたこと、及び、抱える苦労等についても共有できたことにより、今後の業務に意欲的に取り組めるキッカケとなった。				
15	①満足	・他大学との交流ができた。 ・自分と異なる視点を知ることができた。 ・評価者の視点を持つことの大事さを学んだ。	第二分科会での交流、学習内容。	一日目の講演内容が難しすぎた。時間に限りがあったので、内容が全て語られなかった点。			公
16	①満足	他大学の担当者の考え方を、参考となったため。	客観的にみることが大切であることの認識ができた。			スタッフの方々ありがとうございました。	
17	①満足	グループワークに多くの時間がさかれており、講義形式では質問しづらい基本的な事も聞くことができた。とても有意義な分科会でした。					国
18	①満足	・他大学での評価に対する取組を知ることができた。 ・評価制度の全体像について、理解できた。	学内唯一の部署になるため、共有者がいなかったが、同じ分野を担当している方と知り合う機会となった。				
19	①満足	具体的なポイントが解説→実践という流れで修得できたこと。	内容もさることながら、運営もすばらしかったです。	ないです。	同内容でOKと思います。新参加者と異なる分科会参加で、問題ないかと。		国
20	①満足	・実際にグループになって基本的な評価業務の演習を行えたため。 ・他大学の方と情報交換もできたため。	・会場が十分に広がった。 ・指導スタッフが丁寧だった。 ・配付資料は詳しく書かれていて分かりやすかった。	・会場へのアクセスが少しだけ悪い(坂等が多い)。			国
21	②概ね満足	グループがみんな国立大学の人だったので、話が通じやすかった。	人数がちょうどよかった。	部屋が寒かった。	初任者研修は毎年やって、沢山の人が参加してもらおうとよい。		

22	②概ね満足	班に分かれての演習で、自分の気付かなかった事のような意見を聞くことができました。勉強不足であることを思い知らされました。	班に分かれての演習は大変良かったです。「初めて評価を担当される方」の対象だけではなく、上級になっても、同様の形式が行われてもいいのかと思いました。			評価を担当する部署に異動してきたばかりの者にとって、昨日の講演は多少難しく思われました。	
23	②概ね満足	グループワークの時間をもう少し欲しかった。	評価業務への取り組み方が分かって良かった。	初日にグループワークがほしかった。			国
24	②概ね満足	実際に書くことになる文章の問題点を指摘するという形式だったので、気をつけるべき点を確認できた。	・評価・IRのこれまでの取り組みや流れを知ることができた。 ・演習形式・グループワーク形式で実際の作業を体験できた。	特にないです。			
25	②概ね満足	・評価業務についてイメージを持つことができた。 ・法人評価と認証評価の違いや評価担当者の持つべき意識等を知ることができた。	同じ評価担当初心者同士で議論することによって、違った面からの評価への観点を知ることができた。	特になし。	質の保証		
26	②概ね満足	複数人で検討することで、自分では気付かない事項が判明することがわかったため。			初めて評価を担当する人向けの分科会は、今回同様、来年以降も実施して欲しい。		
27	②概ね満足	実務的な講義、演習を通して、基礎的な理解が進んだため。	講演者によってフォーカスするポイントは異なりながらも、言葉の節々に関心事項への示唆を含む内容があり、理解が進んだ。	特になし。	・日本における成功事例 ・事務担当者としての能力開発	有意義な2日間でした。ありがとうございました。	私
28	未回答	実際の業務で、このような視点で取り組めばよいのかと気付きました。			IR(初心者向け)を取り扱ってほしい。		

※属性について 国：国立大学、公：公立大学、私：私立大学、関：関係機関

(大野 [鳥取大])

アンケートのお願い

本日は、ご参加していただき、ありがとうございました。来年度以降も継続的に大学評価担当者集會を企画しております。つきまして、ご参加いただいた分科会及び全体の集會に対してご意見をいただければと思います。ご協力よろしくお願ひいたします。

1. ご参加された分科会について、おうかがいします。

(1). どちらの分科会に参加しましたか。該当する番号に丸をつけてください。

- ① 第一分科会 ② 第二分科会 ③ 第三分科会 ④ 第四分科会

(2). 参加された分科会の満足度について、該当する番号に丸をつけてください。

- ①満足 ②概ね満足 ③どちらともいえない ④やや不満足 ⑤不満足

(3). (2) で回答された理由をお聞かせください。

2. 大学評価担当者集會全体を通して、以下の点に関するご感想・ご意見等がありましたらお書きください。

良かった点

悪かった点

来年に取り扱って欲しいテーマ・内容等

その他ご意見・ご要望等

* 以下は無記名でも結構です。

ご所属 ()

お名前 ()

ご協力ありがとうございました。

5. 本分科会の運営について

5.1 運営スタッフ

○当日のスタッフ

関 隆宏*	新潟大学	企画戦略本部評価センター	准教授
大野 賢一*	鳥取大学	大学評価室	准教授

○当日、本分科会を担当したスタッフ以外の構築メンバー

小湊 卓夫*	九州大学	基幹教育院	准教授
浅野 茂*	大学評価・学位授与機構	研究開発部	准教授
畷田 敏行*	茨城大学	大学戦略・IR室	助教 (当時は、茨城大学 評価室 助教に在職)
藤原 将人*	立命館大学	教学部学事課	課長補佐
長崎 英助	神戸大学	企画部企画課企画評価グループ	主任

*は大学評価コンソーシアム幹事

5.2 本プログラムの構築について

本分科会のプログラム構築については、2008年度～2009年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「大学マネジメント人材育成プログラム構築のための実践的調査研究（研究代表者：小湊卓夫）」とその成果である「SDセミナー—現場と計画評価をつなぐ」（2009年9月九州大学にて実施）を参考にさせていただきました。

このSDセミナーの内容はその後、大学評価担当者集会においても、初任者向けの研修としてこれまで継続して行われてきたものです。九州大学の支援による研究プロジェクトから始まり、大学評価担当者集会における研修実施に至るまで、大変ご尽力を頂いた、関口正司先生をはじめ、九州大学大学評価情報室の室員の方々に、深く御礼申し上げます。

また、平成24年度科学研究費補助金（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「IRマインドを涵養する評価人材の育成プログラムの構築に関する研究」（課題番号：24530988、研究代表者：畷田敏行）も使用しました。

なお、本分科会の実施、成果のとりまとめ、報告書作成にあたり、参加された30名すべての方に感謝申し上げます。